

○小島 周二¹

¹東京理大薬

2011年3月11日に起きた東日本大震災に伴う福島第一原発事故以降、“放射線を正しく理解し、正しく怖がりましょう”というフレーズを見聞きしない日は無かった。原発事故発生に伴い、核反応により生成された放射性ヨード (I-131) やセシウム (Cs-134、Cs-137) が風に乗り、主として東北・関東地方に飛散、その後の降雨により地上に落下、露地野菜や水道水等に混入、日常生活がパニックに陥る事態にまで至った。事故後1年半を経過した今日でも、放射性セシウムによる野菜類や魚介類の汚染に多くの国民が怯え、一方で復旧に向けて、原子炉をはじめ周辺地区土壌の放射能除染作業が行われつつあるものの、今日なお我が国のみならず世界各国に恐怖心を与えているのが現状であろう。放射科学を担当してきた私自身も、原発事故がよもや我が国で起こるということは想像もしなかった。教育の現場を預かる我々教員は今回の事故により、我が国の放射線（能）に関する基礎教育の重要性を改めて思い知らされた。これまでのテレビや新聞をはじめとする多くのマスコミの報道内容の多くは、“現在の放射線量は健康に何ら影響がありません！”のみであり、一般の方々が安心できないのは当然である。本シンポジウムでは原発事故に伴う環境の放射能汚染／低線量放射線の生体影響を私自身の研究結果と過去のチェルノブイリ原発事故及び長崎・広島原爆被ばく調査報告を示す事により、参加者の皆様が多少なりとも放射線に対する恐怖を払拭できる一助になれば幸いである。